



(財)全日本空手道連盟
東北地区協議会議長
飛鳥宗一郎
Souichiro Asuka

1935(昭和10)年、山形県最上町出身。全空連公認段位8段(教士)。和道会8段位(範士)。県立新庄北高校在学中に空手道と出会う。54年、山形大学空手道部に入部。64年、山形大学空手道部師範就任。65年、山形県空手道協会(現連盟)創設にあたり理事長就任。70年、第1回世界空手道選手権大会審判員就任。71年、空手道飛鳥道場(現崇武館)開設。87年、山形県体育功労賞受賞。99年、山形県教育功労賞受賞。現在、全空連東北地区協議会議長、山形県空手道連盟会長、全空連和道会山形県本部長。02年、文部科学大臣より体育功労者表彰を受けた。03年、『第3回日本スポーツマスターズ空手道2003』男子組手6部で準優勝を果たす。

五十二星霜、 未だ道半ばなり

Text by Shigeru Sekimoto
Photographs by Seiji Nishiba



超一流の空手道との出会い

——空手を始められたきっかけを教えてください。

飛鳥「高校3年生の夏休み前の終業式の時でした。母校の新庄北高校に拓大空手部が来て空手を公開してくれたのです。当時の私は柔道をやっておりましたが、その時初めて空手に出会って衝撃を受けました。自分が生涯を通じて武道をやるならこの空手以外にないと、それほど強い印象でした」

——当時の拓大空手部と言えば超一級の指導者を輩出したことでも知られている存在です。

飛鳥「そうですね。山形に來られた拓大の学生達の中には若きOBとして庄司寛先生(山形県出身。日本空手協会最高顧問。03年11月1日逝去や、国際松





溝館空手道連盟館長の金澤弘和先生もいらっしやいました。ですから出会いそのものが第一級の技術を持った方々だったのです」

——その後、先生は山形大学に進学され本格的に空手を始めました。

飛鳥「当時の山形大学空手道部は非常に未成熟でして、高校時代に衝撃的な空手を見ておりますので、このままではいけないということで関東地方の大学の方々と交流を持つようになりまして。そうして大塚博紀先生(和道流創始者)との出会いがあったのです。大塚先生に初めてご指導頂き、昇段審査会に行つたのが大学2年生の11月。そうしていろいろと技術が身に付いてきたのです」

——当時から山形県内では空手が盛んだったのでしょうか。

飛鳥「県内に町道場が2、3ありまして、そこでは非常に盛んでした。しかし、私達が関東の大学と交流を持つようになるとレベルの格差を感じるようになるのです。そのようなこともあり、65(昭和40)年、山形県空手道協会現連盟を設立しました」

9種目中5種目制覇の山形国体

——来年結成40周年を迎える山形県連ですが、その間の大きな思い出と言えやはり92年の山形国体(へいばな国体)でしょうか。

飛鳥「そうですね。当時の新記録72.5点を獲得し、総合優勝することができた

のですから。また9種目中5種目で優勝し、その他にも準優勝が二つありました。さらに天皇・皇后両陛下をお迎えしての国体でしたからあの時の感動は今でも忘れられません。長男の康弘が重量級で優勝したのも嬉しい出来事でした」

——県連国体対策本部長としても重責のある立場にいらっしやいました。

飛鳥「国体までの10年間にもわたる準備期間は確かに長かったですが、その重責を果たすことができたのも、やはり多くの方々との全面的な協力があつたからです。大きな目標に向け、関係者の方々が徐々に階段を登るようになつて努力されたからこそ成功させることができたのです。武田信玄の言葉のように「人は石垣、人は城」だと改めて思いますね」

59歳から始めたウエイトトレーニング

——先生は今でもウエイトトレーニングをされているとお聞きしていますが。飛鳥「こんなせまい道場でですけど、さまざまなトレーニングの器具が置いてありますでしょ。実は私は郵政省の職員を定年1年前の59歳で退職したのですが、その時にいかに自分の空手を持続させることができるのかということに真剣に考えました。それでウエイトトレーニングをするのもその一つの方法なのではないかと思ひ始めたのです」

——59歳からウエイトトレーニングですか。

飛鳥「そうです(笑)。でも我流ではだめですよ。きちんとトレーニングの理論や方法を学んでからやらないと危険です。私の場合は、山形国体の時に県の対策本部が委嘱していたトレーニングアドバイザーがおり、空手道チームも指導を受けていたのですが、国体終了後も数年間継続して来県していましたから、その先生の講習会のたびに若い人達に混ざって参加し、自分なりにトレーニング方法をマスターしたのです」

——効果の方はいかがでしょうか。

飛鳥「当初はベンチプレスが60kgぐらいでもきつかったのですが、やり続けるうちに10kgぐらいは伸びました。運動生理学の勉強も自分でしましたが、理論が付いてくると裏付けができるのでこれがまた楽しいものです」

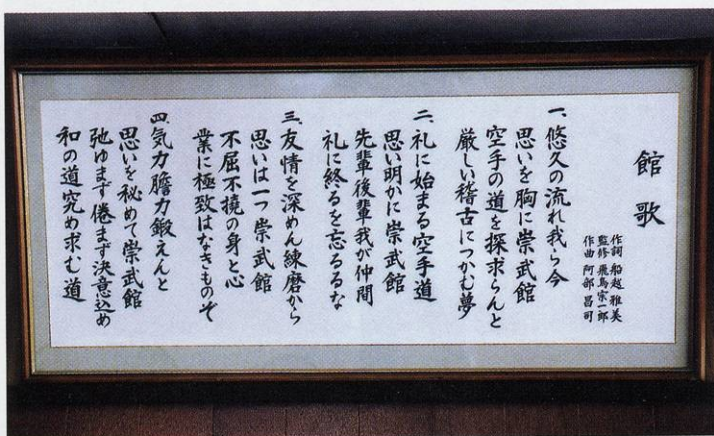
——ハードなトレーニングだけに継続していくことが大変難しいと思われ

ますが。

飛鳥「私のように自分の空手をななるべく長く続けたいといった目的を持っていけば続けられると思います。空手の稽古を主とすれば、ウエイトトレーニングは従のトレーニングですから、研究して行えば空手の技術が高い人ほど有効ではないでしょうか。現在68歳ですのですすが持久力は落ちていますが、加齢に伴う身体の変化についても勉強しながら実践しています。今でもスクワットでは100kgのバーベルを挙げ

ています」

——お話しを伺っていると本当に楽しそうですね。



飛鳥「楽しいですよ(笑)。沢山トレーニングをしているときの方が体調はいいですからね。もし空手に出会っていなかったら、またウエイトトレーニングをしていなかったら、きつとつまらない人生だったでしょうね(笑)」

「気取りがあつて負けたマスターズ

——ところで、昨年の第3回マスターズでは準優勝に輝き、生涯現役を貫く姿勢が印象的でした。

飛鳥「いやいや、勉強することが多いです。決勝戦で戦った箱石勝見先生は和道会の大先輩ですし、先生は岩手県、私は山形県で同じ東北ですから、色々教えていただいたり、あるいは先生の色々な行動を見ながら、そこから学ぶということが多いのです」

——マスターズには興味があつたのでしょうか。

飛鳥「今まで多くの選手を育成し、様々な大会の優勝者も育て、私なりの考え方を話ししたりしている中で、自分が出られる大会はないものだろうかと模索していたことは確かです。いつかそういう大会があつたら出てみたいなと願望がずっとあつたと思います。ですからマスターズが開催されることになった時は本当に嬉しかったですね。プレ大会には日程の都合で出ていませんが、第1回から昨年の大会まで3年連続して出場しています」

——マスターズは準国体とも言われるほど年々活気づいて参りました。

飛鳥「そうなんです。年々選手の技量も向上しておりますし、皆さん十分に練習を積んできて参加していますからね。元ナショナルチームだったとか国体選手だった人達も非常に多くなってきましたし。そういう姿を見てみると、自分でも練習を怠らないで、可能な限りマスターズに出場していきたいという気持ちになるんですよ(笑)」

——練習面で心がけておられる点はありますか。

飛鳥「これは反省点になりますけど、2〜3カ月前からの取り組みだとしてもケガをします。練習中のことですが、1回目は肋骨を折り、2回目は股関節を捻挫し、3回目の今回は大腿部裏ハムストリングスに肉離れが起きてしまいました。調子がよくなったなと思う頃に必ずケガをしてしまうのです。ケガは言い訳になりませんから、年間を通じた調整を行おうとしているところです。それと順位ではなく、自分らしい試合をしようと、そういう意欲だけは持ち続けたいと思っています」

——決勝戦の舞台はいかがだったでしょうか。

飛鳥「いろいろな意味で怖いと感じました。準決勝まで赤い拳サポーターで勝ってきたのに、青に変わっただけで違和感が発生したりして、自分の心の中に気負いではなく気取りがあったことにも気付きました。自分から仕掛けるタイミングがバラバラでしたからね。そういうところを制御できなければ優勝することは難しいと痛感した決勝戦



でした。逆に箱石先生は一昨年のマスターズで決勝戦を経験し、敗れて準優勝となり研究したはずです。今回私が持ったと同じような反省を箱石先生もされたのではないのでしょうか。マスターズの5日後に名古屋で行われた競技力向上コーチ更新講習会で、箱石先生がマスターズまでの取り組みを発表されたのですが、とても勉強になりました」

——反省点が多いと…。

飛鳥「そうですね。箱石先生が自身の心の持ちようがこうであったと披露されたことで、逆に自分の心の持ちようが非常に不安定であったということがわかったのです。津波のような怒濤の攻撃」と敗れた私の攻撃を評価してくださいましたが、本当の津波ではなかったのですね。空手は深いです。でも自分が大きな試合を経験できるようにすると、例えば県連の強化選手を指導

することができません。『私は気取りがあつて負けました』と、自分をさらけ出すことで後進達も納得してくれるのです。実際に試合をしていないと説得力がありませんから」

——今年は東北・福島県でマスターズが開催されます。

飛鳥「一年間どのように心の修行をするかということテーマに調整して出場したいと思っています」

——本日はありがとうございました。